

## 5. セッション2「多様性をはぐくむエリマネ」

### <コーディネーター>

林千晶氏（株式会社ロフトワーク代表取締役）

### <パネリスト>

岩本唯史氏（建築家／株式会社水辺総研代表取締役）

小田嶋 Alex 太輔氏（株式会社 EDGEof 共同創業者 代表取締役 Co-CEO）

若松悠夏氏（株式会社 STORY コミュニケーション・デザイナー／  
3×3Lab Future ネットワークコーディネーター）

鮫島泰洋氏（一般社団法人渋谷駅前エリアマネジメント監事／  
東急不動産株式会社）

まずは、こちらの動画をご覧ください。渋谷の多様性はどのようなものかということ  
で、ほんの一面ではありますが、渋谷を舞台にご活躍するプレイヤーの皆様をご覧いた  
だきたいと思います。

### ～【動画】～

渋谷で農家をしている小倉崇です。私は、渋谷でNPO法人アーバンファーマーズクラ  
ブを設立して、代表をしています。2015年から渋谷で畑をするようになりました。私た  
ちは、原宿、渋谷、恵比寿それぞれのまちに2か所ずつ畑と田んぼを持っています。に  
んじんや、ルッコラ、水菜、白菜、リーフレタスなどがあります。原宿の3つの保育園  
の年長さんが、種まきから収穫までしていて、ジュースにするところまで一緒にでき  
たらと思っています。何か新しいコミュニティの拠点、出会いの場にもすることができ  
たらと思っています。これから渋谷を耕します。

100BANCHの則武と申します。パナソニックの所属で、100BANCHは、パナソニック(株)  
と(株)ロフトワーク、カフェカンパニー(株)の3社共同のプロジェクトとして行っています。  
パナソニックにとって渋谷はあまり馴染みのある土地ではなかったのですが、若者のま  
ちであり、今大きく変わりつつあるまちで、何か新しいものを生み出すエネルギーにあ  
ふれている渋谷でと思いました。若い人と次の100年をつくるための「GARAGE Program」  
で採択されたメンバーが活動する場が、2階のガレージと呼ばれる場所になっています。  
何でも受け入れてくれそうな多様性、かしこまり過ぎていない感じがちょうどいいと思  
います。

道玄坂青年会の長谷川です。生まれ育ちが渋谷で、今も仕事を渋谷でしていて、街の  
活動をしていますので、自らのアイデンティティの創出の場であり、その中でエネルギ

一がどんどん膨らんでいく場であると私は思っています。今後も、渋谷の魅力を上げていける一人になっていきたいと思っています。いろいろな期待を持つことができる街だと思います。

**(林氏)** それではセッション2を始めたいと思います。なかなか過激で渋谷らしいセッション1を受けて、まずはお名前と活動についてと、セッション1への意見を伝えていただいでから進めていきましょう。

**(岩本氏)** 株式会社水辺総研の岩本と申します。水辺の利活用を推進する「ミズベリング」のディレクターをしており、イノベーションやオープンイノベーションを全国で応援しています。セッション1を聞きながら、以前の渋谷では、早い段階で文化を採用するアーリーアダプターやイノベーターを若者が担っていましたが、今はその担い手ももっと年上の世代ではないのかということを加えて言いたいと思っていました。

**(小田嶋氏)** タワーレコードの交差点にある建物に看板が出ている「EDGEof」の共同創業者で共同代表を務めています。クリエイターや起業家、デザイナー、学生、行政、海外からの方々など、いろいろな分野の方が集まって起こるイノベーションを促進する「ゲームチェンジャースタジオ」という事業をやっています。日本と世界のイノベーションのゲートになれるような場所を目指しています。セッション1での議論、渋谷は若者のまちなのかということですが、私は池尻に住んでいて、夜はセンター街を自転車で突っ切っているのですが、そこにいるのは、若者ばかりです。ただ、私が中高時代に学校帰りに渋谷で遊んでいた当時は高校生が主役でしたが、今は、高校生はほとんどおらず、確かに年齢層は上がっていると感じます。

**(林氏)** この間シンガポールに行ったときに、目に入る人たちがみんな若い、ちょっと気になるエリアがあったんです。ここはデートスポットか何かかと聞いたところ(笑)、ここは働く場所と言われて驚きました。日本は高齢化の国というだけあって、目に映る人の年齢層が高く、若い人を見るとプライベートの時間を過ごしている人に見えるのだと思いました。渋谷だけ無理して若者のまちというよりは、みんなで年をとっていいかという気もします。

**(若松氏)** 大丸有におります、株式会社STORYの若松です。セッション1で、若者が絆やストーリーを求めているという話があって、社名がストーリーなのでうれしいと思った次第です。普段は「3×3Lab Future」におり、イベントの企画や運営をしたり、ファシリテーションをしたり、個人会員のみなさんをつなぎながら、いろいろなプロジェクトにしていく役割を担っています。また、(株)NTT データがされている「BeSTA Fin Tech Lab」で、コミュニケーターのような役割で常駐しています。最近では、大丸有の食の

コミュニティのマルシェ部の運営を担当し、みんなでおいしいものを食べたりしています。生まれ育ったのは新宿で、店舗兼自宅の商家の育ちです。セッション1のトークセッションはとても面白くて、途中で何回も林さんと目をあわせて笑ってしまったのですが、渋谷の街が職住近接になっていくということにはとても興味があり、渋谷の街が今後変わっていくのだとしたら、住んでみたい街になると思っています。

**(林氏)** ちなみに、大丸有では、渋谷は比較対象として挙がるのですか。

**(若松氏)** 個人的には、渋谷のことはいつも意識しています。面白いと思う人は活動拠点が渋谷だったり、3×3ラボでお会いする方も渋谷のキーパーソンの一人だったりといった形で、面白い人は渋谷に行ってしまうという気がしています。

**(林氏)** 渋谷のほうが大丸有を意識していて、大丸有は渋谷も池袋も頑張りなさいという、違う視点でいる気がしていて、大阪の人がいつも「京都が」「東京が」というけれど、東京では大阪をあまり意識していないような、ねじれの位置にあるのかと思ったのですが、では、比較的対等に議論ができるということですね。

**(若松氏)** 大丸有は大丸有でいろいろな課題があると思いますし、昨年、エリマネ女子会でニューヨークに行き、そこでいろいろなエリアのお話を聞いて、重なる部分も多く、いろいろなエリアに関わっている人が定期的集まることも大事だという話をしました。

**(鮫島氏)** 渋谷駅前マネジメントの監事で、東急不動産の社員でもあります。最初はハードの方の話ですが、道玄坂一丁目再開発というプロジェクトで、旧東急プラザ渋谷を建替えているところです。再開発事業というのは、地権者さんに怒られながらやる、本当につらい仕事です。できたものが普通ではやっていられないということで、旅行で訪れたバンコクのルブアアットステートタワーというところの屋上にある、ルーフトッパーという、とてもおしゃれなかつこい空間を模して、道玄坂一丁目にも、円盤みたいなものが浮いている屋上に広場とレストランがある建物が、来年竣工します。テナントがつかないのではと言う声を乗り切る私の言葉が2つあります。渋谷らしいからいいじゃないという言葉と、地権者さんがやりたいと言っているのだから仕方がないという2つです。シンガポールにあるマリーナベイ・サンズの屋上を運営しているセラヴィというお店が是非入りたいと言ってきて、クラブもできますので、ぜひ門脇さんにお越しいただきたいと思います。そのようなことをしながら、エリマネもハードとソフトの両方を盛り上げていきたいと思っています。

**(林氏)** 前のセッションを引き継ぎながら、このセッションでは「多様性」について議

論したいと思います。「多様性」は、具体的なイメージができないバズワードになりかねない言葉だと思っています。主役や主体は誰なのか、その多様性は誰にとっての何なのかということを議論しない限り、本質は掴めないと思います。違いを力にしつつある渋谷で実際に活動されている、例えばアレックスさんや鮫島さんから、渋谷に多様性はあるのか、どういう意味でリアルにそれを感じるのかをいくつか教えていただきたいです。

**(小田嶋氏)** 私は母がフランス人で父が日本人で、フランス人学校には 30 数国籍の人もいて、パリの大学に進学し、全く違うバックグラウンドの人が集まっていることが当たり前という環境で生まれ育ちました。大学卒業後に、日本で就職し、初めて日本の文化だけで育ってきた人たちと対峙したわけです。そこでは、当たり前とは全員の共通認識のことを言うので、私が違うと言うと、何を言っているのかという感じになります。フランスに限らず、全く違うバックグラウンドの人たちがまとまっていく中ですごく重要だと思うのが、理解はすべきだけど共感しなくていいということです。そこをうまくやらないと、多様性には絶対つながらないと思います。

**(鮫島氏)** 再開発で、地権者がいると普通は無難な計画になっていくと思うのですが、渋谷の地権者は非常に変わっていて、普通のものとはつまらないと言われます。渋谷の人はいろいろなものを受け入れて、こうしなければという人はほとんどいないです。渋谷には、もっとちょっと面白いものやろうという風土や文化があって、多様性を育む土壌みたいなものを感じながら仕事をしています。

**(林氏)** 渋谷に、多様性を育む土壌がある理由は、何だと思いますか。セッション 1 では、地形や住宅のバリエーションがあるという話がありましたが、理由がなく多様性を育むことはできないと思うのです。具体的に、渋谷は多様だということを支えている要素は何なのでしょう。

**(鮫島氏)** 渋谷は、小さな渋谷村からスタートしていて、小さな地権者さんがたくさんいます。大きい区画が多いと企業的になってしまう気がしますが、渋谷は小さい権利者が数多くいるから面白いし、何でも認めていいという風土になるのではと思います。

**(林氏)** その点は、大規模開発と矛盾が生じるようにも思いますが、どう思われますか。

**(鮫島氏)** 私たちも上司との議論の中で、再開発をすると渋谷らしくなくなるのではないかと、やめたほうがいいのかという話も出ます。だから、セッション 1 の話は、非常にディベロッパーの本質的なところでもあり、渋谷が再開発をしても面白い街であり続けるために、面白いお店に面白い人が入ってくれるために、賃料を安くする仕組みなども会社に提案していかなければならないと思っています。

(若松氏) 点ではなく面で見たとときに、大きいビルと小さいビルのつながりがちゃんとデザインできているかも問われるかとは思いますが。

(鮫島氏) セッション1で疑問に思ったのが、人がまちを歩かなくなるのではないかと、いうところで、私はうまくやれば歩くのではないかと考えています。原宿と渋谷の間にある明治通りの歩行者数は、5, 6年前と比べて3~4倍になっています。人が集まる拠点ができるとその間を人が歩くという実感があります。実際に、原宿も面白いお店が増えているので、そういうまちづくりをしていけば、決して駅の開発だけに人はとどまらないと、希望を込めて考えています。

(林氏) 岩本さんは、場所より人の活動自体にこそ主体性や多様性があふれるという視点で活動されていると思うのですが、絶対に守っていききたい多様性や原動力などを教えていただけますか。

(岩本氏) 2013年にオーストラリアのメルボルン工科大学の先生たちから、東京で川をテーマに展示をしたいというご相談があって、いくつかの場所を見ていただいた中で、渋谷が一番面白いと言われました。日本人が明治神宮の森をつくったことや、川を克服しようとした都市開発の断面が面白いということでしたが、渋谷に来ている女の子たちは川がどこにあるか知りません。海外の人が、自然と都市との相克という視点で東京を見出してくれるのはとても面白いと思います。私は、豊田市や和歌山市、都内だと墨田区などで、水の上を使いこなしてくれる人たちは誰なのかを掘り起こす活動をしています。その人の人生の中での川やまちの位置づけ、そこで一緒にできることは何かなど、深く信頼関係のもとでつながっていかないと、まちはよくなりません。そういうことを話せる土壌があるまちは、そもそも力強く、若松さんのされているように、コーチングしながら、まちの魅力を考えていくと面白いと思います。

(林氏) ミズベリングの活動をしようと思うのは、若者ですか。

(岩本氏) 誰でもいいのです。常日頃から表現する場がなかったり、それを表明しているのかもわからないという人がたくさんいます。水辺でやりたいこと考えてみましょうと言うと、みんな「うおー！」と出てきます。

(林氏) 高齢の方も来るのでしょうか。それは若者だけの取り組みではないと思わせる仕組みがあるのでしょうか。

(岩本氏) 若者だけではないです。信頼関係のある人から人へ、あるいはもともとあるコミュニティを中心にして広めてもらったり、基本的に声かけの連鎖です。

(若松氏) 3×3ラボは岩本さんにとって川のようなところで、いろんな人が集い、多様な人が来ています。平日の10時から18時、個人会員として場所を使える、コワーキングのようなオープンスペースで、今年度で登録されている会員が300人います。新規の方が登録される時に必ず面談をして、3×3ラボのことをまず知ってもらい、ご自身の活動とどんな接点があり、どんな人と仲良くなれそうかという話を、30分から1時間くらいしています。運営者と会員の関係ができることで、運営者を通じて会員同士の関係をつくっていくという人のつなぎ方をしています。会員は、ひとくくりにはできないのですが、50代くらいの男性が多く、大企業を経験して、自社や自己利益だけではなく社会に価値を生みながら活動を継続しているというタイプの人が多いです。

(林氏) 会場の皆さんにも、何の違いで多様だと思うかというのを尋ねてみたいと思います。

まず性別が違くと多様だと思う方、いかがでしょう。

——二人くらいということは、性別はもう多様ではないということでしょうか。

次に、格好です。ジーンズもドレスの人も、いろいろな格好の人が歩いていると多様だと感じるかというのは、いかがですか。

次に、年収。お金持ちもいればそんなに持っていない人もいるというバラエティがまちの多様性だと思う人はいかがですか。

——これは五分の一以下くらいですね。

では次は、趣味。興味があることや活動の内容こそが多様性と思う方はいかがでしょうか。

——半分くらいですね。

ではシンプルに、年齢。赤ちゃんからお年寄りまでいるというのはいかがでしょうか。

——これも三分の一くらい。あまり皆が合うものがないですね。

さっきの議論で出ていた、住むまちでも、遊ぶまちでも、働くまちでも、つくるまちでもあり、という行動に多様性があると思う方はいかがですか。

——これは今までの中で一番多いようです。

もう一つ、お金のため、文化、世界平和、マイノリティの活動など、描いている夢やビジョンが違うというのが多様性のまちという方はどれくらいいるでしょう。

——これも半分くらいですが、壇上の方は比較的多いです。全員の手が上がるのはなかったことから、多様性とは、言うは易く行うは難しですね。

改めてパネリストの皆さんに、活動の中で、力に変わる違いは何かということと、そこに必ず起こるストレスをどう克服するのかを聞きたいと思います。便利さや効率化ともほど遠い多様性に、渋谷が本気で舵をとるのなら、AIの最適化やユニバーサルは諦めてください。小竹向原で、私の友人が保育園をつくったので、どうして小竹向原なの

かと聞いたら、音大の学生が多く、ピアノなどの音に慣れているから、クレームが出ないということでした。逆にお金持ちが住んでいるところに保育園をつくりましょと言ったら、悲しいほど反対が出たりします。いつも音が鳴っているから音って鳴るものというくらい、普段から目に見えているだけでも多様性は担保されていると思ったりします。そんなエピソードも踏まえながら、皆さんが守っている多様性とはどんなものがあるか、そして生まれるコンフリクトをどう避けていくのか、もう一步踏み込んで聞いてみたいと思います。

**(岩本氏)** 私は河川を利活用するときに、まずは社会実験を推奨しています。そうすると、社会実験の段階で許してくれることも多くて、次につながっていくことがあります。豊田市の矢作川の河川敷で行っている「橋の下世界音楽祭」というフェスは、地域のため、音楽のために、社会のために強い思いをもつ多くの方たちに支えられています。中にはいろいろな方がいて、私自身も差別感や心の弱さを感じて、自分も多様性を阻んでいる側にいるかもしれないということに気づきます。多様性はすでに社会の中にあって、それを受容できる環境をつくるのは一人一人の主体性ではないかと感じます。そこが私のチャレンジの根源になっていて、地域の人たちをどう理解をするかが、私にとっては重要だと思っています。

豊田市では、駅前の広場を降りたところにコンテナを一個置いてカフェスペースを運営していて、そこに多様な人が来て人間の交差点のようになって、市の活力になっています。そういう活力のあり方は、戦略的にマネジメントできるというのが、私の今の思いです。

**(林氏)** エリアマネジメントをやっていると、実際に触れ合ったら分かり合えて、多様だというようにいけるのでしょうか。

**(鮫島氏)** そこまでいくことがそもそも難しいのかなと感じています。ただ、さきほど動画に出ていた、NPO アーバンファーマーズクラブもそうですが、渋谷にはいろいろと活動している人がいます。そういう人がもっと活動できるようにするのが、エリマネの役目と思っているのですが、活動する場所の家賃が高かったり、いいことしたいけれどお金がかかるということもよく言われています。それならば、エリマネで集まったお金をそういう人たちに使って、ストレスを下げていくと、活動が広がっていくのかと思うのです。広がった先に喧嘩が生まれたら、そのときにどうするか考えるのですが、まずはそういう活動をもっと育てていくことがスタートだと思います。渋谷川で本当に川遊びをしていたという人がいて、あの川で？と思います。10年後20年後にメダカが泳いでいる川になればいいなあとエリマネで話しています。ストレスがある段階までまだ行っていないので、そこまで行かせられるように頑張りたいと思いながら活動をしています。

(林氏) 多様性とは、みんなが主役でみんなが主語で、自分のまちを考えられる場所となると、エリマネは、いろいろな人たちの集合体で、どうやって共通のビジョンを出していくのでしょうか。

(鮫島氏) そこは非常に悩んでいるところですが、それぞれに活動をしている人や地元の人たちに、エリマネが一番上のような顔しているなど言われます。やはり、上下の関係ではなく、連携とか参加しあう緩い横のつながりで、人が広がっていく関係性の仕組みをつくらないと、なかなかうまくいかないと感じています。10年間、神輿を担いでいると、組織の肩書は関係なく、商店会の人ようになっていきます。時間も重要ですが、スタンスも従来と異なり、横のつながりの時代になってきていると感じます。

(林氏) 今、多くのまちが、工場なら工場用地、農業なら農地と、一つの目的に最適化しているまちのつくり方をして、同じ場の中にいろいろな人がいるという景色が減ってしまっていると思うのです。渋谷は、効率が一見悪いようでも、いろいろな目的を持っている人たちが集まる場をもう一度つくっていかねばならないのではないかと思います。FabCafeは、一つの機能に特化したり、誰のためというマーケティングは一切ない場所です。ボーイフレンドにあげるマカロンに模様を入れている女子高生、家の表札作りに来たおじいちゃん、ミシンを使いに来たおばあちゃんと、いろいろな人が来ています。これからどういう空間をつくると、もっと多様な場面になるのでしょうか。

(小田嶋氏) 我々の建物は、八階建ての地下から屋上に、クリエイターが集まれる防音室、レストランが開けるようなキッチン、茶室、イベントホールやショールームがあります。最初は思い切って借りて、作って、さあどうしようかという動き方だったのですが、いろいろな人が来て、楽しいと思ってもらえることはすごく意識していました。私の中で、多様性は絵画のパレットのイメージです。新しい絵を描くときに、パレットにはいろいろな色の絵の具がないとだめで、しかし全部混ざってしまうと均質になってしまいますので、もともと自分の所属している赤や青、緑という戻る場所はあるながら、少しずつ新しい色をつくって絵を描いていくというのが重要だと思っています。イノベーションにかかわっている私たちが、人を集めて新しいことをするとき、多様性を生むためには、切り分けたまま、それぞれが触れ合う距離感が大事だと思います。スケボーの人、音楽の人、古いタイプの飲み屋さん、おしゃれなバーもあって、それぞれ求めているものは違うが、お金で買えない何かがある場所にあって、集まって楽しさを感じられるというのが、渋谷のすごいところです。

(林氏) 昨日、ヨーロッパがGDPR (EU 一般データ保護規則) をなぜ導入するのかちょうど議論していました。フランス革命における三権分立は「自由」(文化と主体)、「平等」



(法律)、「友愛」(経済の再分配)を成り立たせるものだったのですが、20世紀の資本主義で、「自由」が経済活動に乗っ取られたことに対して、ヨーロッパは改めて文化はお金で生まれるのではなく、自分の主権とマインドの自由さが人間としての一番のベースだと言っているということなのです。そろそろ時間ですので、ここに集まっている日本のまちづくりを動かしていく方たちに、一人ずつ陳情をしましょうか。

(鮫島氏) それぞれのまちにある魅力的なお店を、皆さんも守っていただきたいと思います。それは、ディベロッパーにはできないことなのですが、一時期の利益ではなくて、やはりよいものを永く守っていきましょうということでもよろしいでしょうか。

(若松氏) 林さんがおっしゃった「違いを力に変えるには」という問いが深いと思います。関わろうとする気持ちを持って、隣にいる人は面白い人かもしれないと思って暮らしていると、意外と楽しい出会いがあったり、いろいろな人の引き出しを開けられたりするのです。そんな心持ちで過ごす人が増えたら、きっと違いが力になっていくことに近づくのかと考えていました。

(小田嶋氏) 分かりやすいというところで、一つお願いがあります。自分は以前、地方創生系のプロジェクトで、全国で地域の問題やお話を聞かせてもらう機会があったのですが、課題を解決しようとするときに、どうしてもご意見番が出てきます。日本の文化として、年齢の上の人は経験も豊かだし尊重するというのは分かりますが、若い人の言ったことを頭ごなしに否定したり、経験不足だという言葉で、新しく出てきた可能性をつぶすのだけはやめてもらいたいです。あなたの経験したことのないことをやろうとしているのだから分からないということを受け入れる土壌が必要だと思います。

(林氏) 経験していないからこそ提案できることは、たくさんあると思います。

(岩本氏) 私は皆さんに、属人的であることにどれだけマネジメントがチャレンジできるかということ、問いかけたいと思って今日は来ました。魅力的な人がいて、人がつながることはとても価値が高いことだと思います。今まで組織運営が、なぜ属人的であることを排除してきたかということ、透明性が失われるなどということかと思うのですが、今はネットなどの技術もあって可視化が可能であるし、その人の魅力によって、まちを魅力的にするチャレンジができる時代になったと思います。

(林氏) 私からも最後に一つ加えると、エリマネという言葉は、聞いた瞬間にあまり楽しそうではないです。でも人は楽しそうなことにしか行かないと思うのです。それならば、いろいろな趣味を教えてもらって楽しいとか、モテるとか、ポジティブなストーリーをどんどん使って活動していくしかないのかと思うので、苦しい大変な仕事というよ

りは一番かっこよくておもしろい仕事となっていけばいいと思います。ここで、セッション2を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。